

対象及び方法：1984年11月27日から1985年1月7日の間に当院内科を受診したインスリン自己注射を行なっている患者72名，男34名，女38名について面接調査した。

結果：インスリン注射の手技的な面は余り問題はなかったが薬剤名を正しく知っている人は48.6%，低血糖症状の経験者は76.4%，低血糖の予防として砂糖などを常に持参している人は16.7%，食事の指示単位を正しく答えた人は56.9%，運動についてはすべての人が気分転換程度にとどまり，運動療法といえる程ではなかった。インスリン注射をするのがいやになったと感じたことがある人は65.3%であった。以上の調査結果をもとに，今後のインスリン注射指導を検討していきたい。

12. 速効性と中間性インシュリン製剤混合後の溶解性変動について

堀 みつる，他（県立ガンセンター）
新潟病院薬剤部

最近，糖尿病のインシュリン療法において，速効型と中間型インシュリンの混注療法の有用性が多く報告されている。そこで，患者に一定の割合で混合した製剤を投薬できれば，コンタミを防止し，投与量も正確になり，患者の負担も軽くなると考えられる。当院では，この混合を薬剤部で行っているが，混合した製剤の安定性の検討の1つとして，混合液中の速効型インシュリンの溶解性の変動について実験を行い，その結果と混注療法を行っている患者の血糖値から考察を加えた。

インスラタド：ヴェロスリン（7：3）混合時には，経時変化に伴い，溶解性インシュリン量は減少傾向を示すが，これは臨床上の血糖コントロールには影響を及ぼさないと推察される。

13. 妊娠末期に急激に発症し，風疹ウィルス抗体価の上昇を示した IDDM の1例

鈴木 丈吉・富所 隆（長岡中央総合）
病院内科
田中 康一（同産婦人科）

症例は22才女性で，父，祖母に糖尿病あり。15才時風疹に罹患したほかは著患なし。

1984年5月より初回の妊娠：妊娠経過は順調であったが，第31週，33週の検診で尿糖が陽性であった。第33週3日目の12月30日夜より急激に悪心，嘔吐，口渇が出現し，12月31日夜から意識障害もみられた。1985年1月1日死産（2,290g，女児）。1月2日血糖 512mg/dl，尿アセトン体（H）で，糖尿病性ケトアシドーシスと診断され，大量補液，インスリン持続注入にて回復した。1月4日のHbA1は7.9%と正常範囲内であった。各種自己抗体，ICA，ICSAはいずれも陰性であった。尿中CPRは測定感度以下で，その後CSIIを経て，インスリン分割混注（1日総量36単位）にて良好にコントロールされている。

風疹ウィルス抗体価（HI）法が64→512倍と上昇を示し，風疹ウィルス再感染に伴って発症したインスリン依存型糖尿病と考えられた。

14. 糖尿病性腎症における FUT-175 の尿蛋白減少効果

八幡 和明（新潟大学第一内科）
他内分泌班一同
矢田 省吾（木戸病院内科）

ネフローゼ型糖尿病性腎症における高度の尿蛋白排泄は臨床的重大な問題であるが積極的治療は確立されていない。我々は蛋白分解酵素阻害剤であるFUT-175を使用し尿蛋白減少効果を認めたので報告する。〔対象〕NIDDM 4例 IDDM 2例の計6例でいずれも重症の合併症を有し一例を除きネフローゼ症候群を呈していた。〔方法〕全例入院の上尿蛋白排泄量安定後，FUT-175を10mgから40mgまで3～4週間点滴静注療法を行った。投与前後で食事や内服薬等の変更は行っていない。〔結果〕尿蛋白減少率（D値）50%以上の著効1例，25～50%の有効4例，25%未満の無効1例であった。血清総蛋白，アルブミン濃度は漸増した。尿中FDP，尿中 β_2 microglobulinはFUT投与後減少した。〔考按〕糖尿病性腎症の発症進展機序に血液凝固線溶系の関与が推定されている。FUT-175には血小板凝集抑制効果も報告されており，尿中FDPの減少と考えあわせると興味深い。今後症例を重ねて検討したい。